

昔話の中の歌謡

真鍋昌弘

昔話には、しばしばうたが出てくる。その一つは、和歌・連歌・俳諧のようなものである。〈皿々山〉〈西行と女〉など、和歌で優勢を競ったり、咄嗟に応答して相手をやりこめたりするところが話の頂点となっている。上句と下句との付合の機智で聴き手をよるこぼせる系統もあって、例えば〈十五夜の月〉〈待と馬子〉など、我々の知るところである。

先年、田中瑩一・田中裕子両氏による「昔話に見られるうたの諸相」という発表を聴かせていただいたことがある（昔話研究懇話会・第十三回大会）。資料は高根県下のものに限定されていたが、うたを最大限広く解釈して、実際の語りの場で、リズムカルに抑揚をつけて語られる部分、つまり擬声語や語呂合せなどをうまく取り入れて聴かせようとする部分や調子のよい呼びかけ・まじないなど集めてうたの範疇に入れ、こうした最も広義と言えるうたの機能的分類案・音楽的特色其他を考察されていたように思われる。こうしたうたの設定の立場もあった。

さて、私がここに記すのは、日本歌謡史研究の側からの、昔話に見える歌謡という問題についての覚書である。さしあたって、具体的に、どのような歌謡がどれだけ昔話の中に受け入れられ、それが歌謡史の上ではどのような伝承過程を辿る種類であるか、ということとに触れている。歌謡の実体推定の端緒でもあり、口承文芸として

の文芸性にかかわる問題点も含んでいる。

歌謡が昔話の中に存在しているその情況考察は、大きく見て、歌謡と物語の関係の延長線上に置いてさしつかえない。そこで物語の中に見える歌謡の場合と同様、昔話の中に見える歌謡の三つの場合は次のごときものであると思われる。かつて土橋寛博士の、記紀歌謡の実体について考察された方法（例えば『古代歌謡の世界』・序章）が参考になる。

A 本来から昔話の中に存在していた歌謡。昔話歌謡。すなわち、昔話の伝承者（又は作者）によって、昔話の一場面にあわせて、独自に創作されたもの。

B 昔話の伝承者（又は作者）が、当時あるいはそれ以前において、実際うたわれていたり記録されて伝えられていた歌謡を取り入れ利用して、その昔話の筋に合うように、一部分を適当に作り変え、昔話歌謡化して、登場の人物や動物等にうたわせているもの。もちろん、その改変は、もとの歌謡が判明できる程度においてなされているものである。

C 昔話の伝承者（又は作者）が、当時あるいはそれ以前において、実際うたわれていたり記録されて伝えられていた歌謡を、ほぼそのまま取り入れ利用して、昔話歌謡化して、登場人物や動物等にうたわせているもの。

これらが、昔話の中に見える歌謡の三つの在り方・場合である。

B・Cの場合、歌謡の物語内への取り入れられ方というふうに見える。取り入れられたその結果、広義の昔話歌謡となっている。しかしAの場合、他のものを持ち込んできたわけではなく、元来、その昔話と共にあったわけであるから、取り入れられたという表現は適切ではない。けれども、また一方では、昔話・物語・小説のちがひも意識しておいてよい。つまりAの場合でも、かつて庶民生活の中で誰かわからない或る伝承者(又は作者)が、昔話の一つの頂点として生み出したものであるから、専門家の個性を生かして作り上げた歌謡とはやや性格を異にする。しかも或るリズムと抑揚をもつて、生のままの生活・習俗をも多分にふまえた話の中で伝承されてきたわけであるから、今後、Aも日本歌謡史研究の資料として、少条件つきで、参考にすることができるとも多々多いと思われる。

本稿では、このA・B・Cのすべての場合について述べる余裕がないから、日本歌謡史の側から、さしあたって注意されるB・Cのケースで、具体的にいくつかを考察する。

(1)

異類婚姻譚の一つに〈猿簀入〉がある。話の筋は言うまでもないが、末娘が猿のもとに嫁入する途中、あるいは爺様に逢いに帰ってくる道中、智慧をはたらかせ、重い物を背負わされている猿簀に、梢の花を取らせたりして、谷底へ落とすことになっている。このとき、その伝承地の多くで、猿簀は辞世の歌を詠む。『日本昔話大成』が、このタイプの代表として冒頭に引用している山形・最上郡の場合は、「猿は沢に流れる、猿の命は惜しくなければ、あどでおそめはお泣

きあるらん」となっている。こうした歌を置きながら、猿簀入譚は、鹿兒島の奄美大島から青森・下北半島にまで全国的に分布している。

そうした中で、播磨・神崎郡・栗賀村の場合が注意される。ここでは、瓶を背負ったままで、娘のかんざしを取りに水に飛び込んでゆき、それを見て娘(つまり猿の嫁)が、

○抱いて寝もせずいとまもくれず繋ぎ猿とはわしがごと

とうたつたという(『旅と伝説』第四年四月号)。娘の歌としては、歌の後半が不似合になるが、そのように伝えている。「抱いて寝もせず暇もくれず」の部分は、女から男へのうたいかけであるから、娘の歌として、本心からそう思っているわけではないのだが、一応大きな矛盾はない。

まず各地の民謡に求めることができる同類歌の一部分を掲げる。

□抱いて寝もせぬいとまもくれぬ繋ぎ船とはわしが事(福岡・田川市・撰炭節)『田川地方民謡集成』

□抱いちや寝もせずいとまもくれずわしは港のつなぎ船(広島・安佐郡・田草取歌)『広島県の民謡』

□抱いて寝もせずいとまもくれずそれじゃ港のつなぎ舟(長野・諏訪地方・湖舟歌)『諏訪の民謡』

他に、鹿兒島・小原節、千葉・木更津甚句などにもとられ、後半をそれぞれ「つなぎ船かやわしが身は」「それじゃ港のつなぎ船」でうたい継いでいる。これらと比較するかぎりでは、「繋ぎ船」の部分を「繋ぎ猿」として猿簀入譚に持ち込んだと見ておいてよいのであるが、加えて、次の用例はぜひ加味しておくべきであろう。

すなわち、文政五年序のある「賤か歌袋」第五篇に、

□抱いて寝もせずいとまもくれずつなぎ去りとはおれかこと

が記載されているということである(この民謡に付記されている教

訓的附会の弁は、いま必要ないので省略する。『賤か歌袋』は西播磨・赤穂の医師・菖庵深沢高直が集めた古謡が中心となっているので、右の用例もその土地のものとしてさしつかえないと思われる。はたして、神崎郡の猿嫁がうたったという「繫ぎ猿」と、この「繫ぎ去り」がすこぶる近似しているわけで、両者は一つの系統とすることができよう。「繫ぎ去り」という表現に問題はあがるが、やはり、猿入譚の歌は、当地にうたわれていた民謡を引き入れ、一字を変えて「繫ぎ猿」として昔話歌謡化したと見ておいてよいのではないかと思われる。もちろん、江戸後期におけるこの民謡の標準的な型は「繫ぎ船」の方で、これの方が民謡としてはおもしろい。昔話の中の歌謡の在り方としては、一応Bということになる。

なお、うまく猿舞から解放されて、娘がうたう型では、他に、
○一夜ねもせずそひもせずおさる後家とは云はれまい（大阪・北河内郡）『河内九個莊村郷土誌』
○一夜寝もせず笑われもせずお猿後家とは情ない（大阪・泉大津市）『日本昔話大成』

○一夜寝もせぬ添いもせぬお猿後家じやといわりやせぬ（大分・国東半島・国見町）『国東半島の昔話』

のパターンがある。この「一夜寝もせず添いもせず」の発想表現は、「抱いて寝もせずいとまもくれず」の型に近いものであるが、いまのところははっきりと民謡の常套句とすることができない。しかしこの場合を、昔話の中に見える歌謡の在り方のAと決めてしまうこともできないようである。

かつて私は、室町期物語「藤ぶくろ」の畑打歌や祝言歌謡についてふれたことがあったが（室町期物語に見える歌謡、『文学・語学』・80合併号）、このように、説話や昔話の中では、猿の登場に際して、庶

民生活の中の歌謡が好んで用いられるという傾向はあったようである。妻問う猿もうたが好きである。

(2)

隣の爺型の一つで、〈鼠淨土〉の話が知られているが、歌謡との関係で必要な部分は、当然鼠の国の餅搗き場面である。鼠達は、「何がこわいというたとて、猫ほどこわいものはなし」（大分）、「猫がいなけりや花のお江戸じゃ、餅搗け餅搗け」（福岡）、「猫さえおらねば、世の中チャンカラコ」（兵庫）、「この婆婆に猫さえなければ、千年万年寝てくらす」（福島）などとうたっている。東北地方では、「猫の声は聴きたくない」とするのが多い。この系統でも、民謡の断片を取り入れている場合がある。

○今年しゃ豊年穂に穂が咲いてね 庭の小草に米がなる 猫の声も聞かんぞ べたんべたんべたんこ（愛媛・北宇和郡）『広見町昔話集』

これは言うまでもなく、全国的に盆踊歌や祝歌として伝承しているもので、はやく『落葉集』・巻五、『延享五年小哥しやうが集』、『山家鳥虫歌』などにも見えている。もう一つは、次のような場合である。『日本昔話大成』が、『加無波良夜譚』から引いている例である。

○鼠とこびきは引かねば食んね 十七八なるども 猫の声は聞かぬはしちよはちよ（新潟・見附市）

はじめの部分は、各地でうたわれる木挽歌のきまり文句である。
□挽けどしやくれどこの木は挽けぬソートモくく どの野中の松じゃやらドシコメ アードシコメく 木挽と鼠は挽かねば喰は

れぬソートモ〜 (三重・三重郡) 『俚謡集』

ひかにや食えない食やまた挽けぬ (石川・輪島市) 『石川県の民謡』
木挽きとねずみはひかなぎや食えぬ (群馬・山田郡) 『群馬県郷土民謡集』

こうした木挽歌を、引かねば食えない鼠達が、餅搗歌にしている。笑いの趣向がここにもある。昔話の中における歌謡の在り方のCグループであらう。

なお、奈良絵本や絵巻の『鼠の草子』類にも、鼠達の仕事歌をいくつか指摘することができ、すでに拙稿で述べたように、まことに上手な利用の実際を知ることができた (『鼠の草子』に見える小歌、奈良教育大学『国文―研究と教育―』3号)。説話や昔話では、猿と共に鼠も、いろいろな小歌・民謡を知っていたということになる。

(3)

我が国での〈歌う骸骨〉の採集例は、あまり多くないようであるが、話そのものはよく知られている。あの話で、殺された男の骸骨が藪の中でうたい、相手の男が長者に首を切られて、うまくその男を討つことに成功した後に、骸骨はもう一度うたう。この歌を見渡して、民謡と照合すると、甌島の場合の、

○かのかのたまた思た事かのかのた 末ぢゃ 鶴亀五葉の松 (鹿児島・下甌島) 岩倉氏『甌島昔話集』

をうたわせる系統を拾い出すことができる。この祝歌は、一部分次に掲げるところからも、広く伝承していることがわかる。

○なおも目出度の思ふ事あかのかのた末は鶴亀五葉の松 (鹿児島・種子島・めでた節) 『南日本民謡曲集』

○思かたかのた末は鶴亀五葉の松 (鹿児島・球磨郡・祝歌) 『日本民謡大観』九州篇南部

○叶うた〜思ふ事叶うた末は鶴亀五葉の松 (広島・竹原市・祝歌) 『日本歌謡類聚』

○御用は調ふたナンヤレ思ふ事かなうた 末に鶴亀五葉の松 (三重・三重郡・祝賀歌) 『日本歌謡集感』巻十二

○うれし目出度い思ふ事叶うた末は鶴亀五葉の松 (新潟・佐渡・祝儀歌) 『佐渡の民謡』

この類型としては、『山家鳥虫歌』の、
稲の葉結び思ふ事叶ふ末は鶴亀五葉の松 (丹波)
にまで及んでよい。

この祝歌を、昔話では骸骨に、まず家々を廻り行く祝福芸の歌謡としてうたわせ (骸骨を手にしたこの男は、どの伝承例においても、金持ちの家々を廻り行く門付け祝福芸人に転職したことになっている)、続いて、相手を討ち「思ふ事がかなった」終末において歌わせている。民謡を巧みに利用した用例と言えよう。口承文芸としてのおもしろさを味わうことができるが、この民謡が本来或る神秘的な力をもって伝承していたという面も考えられる。昔話の中の歌謡の在り方としては、Cグループである。

(4)

〈蜜柑売りと女房〉という話が、『大南北麓の昔話』に採集されている。『日本昔話名彙』『日本昔話大成』には見えないもので、この出典なども吟味する必要はあるかもしれない。蜜柑売りが泊めてもらった宿の主人は、夜になって囲炉裏で奥さんと一緒に、ちろり

(銚釐)で酒を燗して飲むが、その蜜柑売りには少しも与えない。蜜柑売りはその敵を取ろうと思つて蜜柑をうまさうに食つて相手にやらない。そこで、宿の妻が「あなたさんはみかんずきさまよ」と言いかけると、蜜柑売りが「宵にちろりと見たばかり」と返しつたという。昔話としては、その遣り取りがなかなか巧妙であつて、おもしろいものであるが、これは明らかに、次の系統を捻つたものであることがわかる。

○様は三夜の三日月さままで宵にちろりと見たばかり(鳥取・東伯郡・臼摺歌)『因伯民俗調査』

○さまとさんやの三日月さんは、宵にちろりと見たばかり(高知・香美郡・田草取歌)『土佐民謡集』第一輯

○様は三夜の三日月様か宵にちろりと見たばかり(愛知・碧海郡・靱すり歌)『愛知県地方の古歌謡』第一集

江戸期の書き留めとしては、安永五年刊『艶歌選』の中に、

○君は三夜の三日月様よ宵にちろりと見たばかり
を指摘でき、そこまで逆上れる。加えて、同類型で、この型と連作的趣もある。

○様は三ヶ月よいくどっこいよいくどっこい宵御座る せめて今宵は有明に『松の落葉』・卷四・荒木弓踊)

○さまはさんやでよひくどござるせめていちやはありあけに『山家鳥虫歌』・山城)

に関連してくるであろう。特に後半の「ちろり」を、昔話の方では銚釐をかけて「ちろり」として取り込んでいる。なお、『因吟集』・49番「世間はちろりに過ぐる ちろりく」のうたい方において、本来「ちろり」の意味で、それを「ちろり」としてうたつたのであれば、いま右に見た関係が参考例になる。昔話における歌謡の在り

方としては、Bグループである。

(5)

〈田螺長者〉の分布は広いが、山形・小国郷のそれが、田螺殿つづのわらべうたを入れるという技巧をもって伝わっている。四月八日・薬師様の祭に出かけた田螺の嫁は、待たせてあつた聾の田螺殿が見えないので、泣き泣き次のようにうたつて捜す。

○田螺やア田螺やア抜け田螺や 去年の春をへつたれば 鴉と云うに馬鹿鳥に づつぐらもつくら刺さアれたアとオなア『小国昔話集』

「田螺や田螺や」と呼びかけるところなどは、この昔話の筋によく合っているので、取り入れられたのであろう。同じくこの昔話集編者が出された『羽前最上小国郷のわらべうた』には、かくれんぼ遊びの鬼決め歌として、同歌が掲げられているが、同類歌は、宮城・岩手・福島各県に伝承し、一方田螺へ「彼岸参りに行かぬか」などともかけると、田螺が鴉の恐さについて答えるという型は、例えば千葉・東京・愛知・岐阜・三重・大阪・長崎などで採集されている。ともかくこの場合、土地のわらべうたをうまく取り入れているわけで、昔話に見える歌謡の在り方としては、Cグループである。

なお、この田螺殿のわらべうた(特に右に言う、田螺殿に対して……へ行かないかと誘う型を中心として)は、すでに藪田義雄氏『わらべ唄考』・浅野建二氏『わらべ唄風土記』などで書かれているように、江戸時代においては、祝福芸人として地方に残存した幸若舞がうたい広めたものようである。これについては別の機会に

述べたいと思うが、確実な資料として、『俚語集』・福岡・舞々の祝歌などと共に、以前、藤田徳太郎氏が最初に注意された小冊子『幸若集・初篇』（明治十八年刊行・埼玉県住人林又兵衛編）が活用されねばならない。

以上、昔話の中に取り入れられた歌謡について、四例のみを掲げるに終った。さらにこのように具体的な考察をあと少なくとも数種述べる準備をしたが、ここには省略する。例えば、へ山田白蓮の、黒鳥が飛ぶときは五重の塔も下に見る、などとうたい返す型も、浄瑠璃十二段・枕問答の一節から直接採用したのかどうか疑問で、段階として田植歌としての伝承を通して取り入れているふしがある。

こうした個々の考察を通して、昔話の中へ流れて行った歌謡の一筋一筋を確認することができ、それらを束ねて、日本歌謡史上の近世後期における一つの問題ある側面として、明示しておかねばならない。時期的に、近世後期を逆上することはほぼないと見てよいのではないかと思われるし、本邦において、昔話は近代ではすでにその増補を繰り返すことはなく、その基本となるタイプと数はすでに決定しているから、右に言うB・Cの場合も、詳細に調べれば、明瞭な数と情況が把握できるとしてよい。ただしそのB・Cの数は、例えば中世末期以後の語り物などに用いられた歌謡の数とくらべてみると、はるかに少ない。昔話は昔話なりにうたを作り出している場合（昔話歌謡）の方が多くいわけである。以前友久武文氏も、記唱歌謡の場合にならって言えばとして、「昔話のウタは、独立歌謡としてよりも物語歌謡としての性格が濃厚だということになる」〔昔話と歌謡〕三弥井蓮書『昔話研究入門』所収）と述べておら

れる。囃子詞や唱え言も含めて、AあるいはA的なものが多いのである。しかし、右にも述べたように、歌謡史の側から見れば、まずB・Cをはっきりさせておかねばならないということになるのは当然である。

昔話に見える歌謡は、近世後期民間に広くうたわれた、民謡・俗謡・わらべうたであり、それら歌謡の昔話内に働く様相が、実生活におけるその歌謡の実体を象徴している場合もある。またそれら生活とともにある歌謡が、動物や架空の者によってうたわれているわけで、そこには、昔話の幻影の世界と村人の現実生活との仕切りを取り払う役割りを見ることができるといえる。歌謡は昔話の中で、はなしの本当らしさを印象づける結果となっている場合も多いのである。

（まなべ まさひろ・奈良教育大学）